

大学1年生の学業に対するリアリティショック状態における 職業意識と学ぶ意欲の関連性

岩井 貴美

要 旨

本稿は、キャリア発達における探索段階である大学1年生において、学業に対するリアリティショックの状態における職業意識、学ぶ意欲との関連性を明らかにした。学業に対するリアリティショック状態である大学1年生を対象に、職業意識、学ぶ意欲との関連性を明らかにするため、アンケート調査を行った。データ分析の結果、まず、学業に対するリアリティショックと職業意識の関連性は、学業に対する意識が低下し、職務探索行動が行われていない状態であることが明らかになった。さらに、職業意識と自ら学ぶ意欲の関連性を明らかにした結果、職業選択について安易に考えるほど、自ら学ぶ意欲が低下状態であることが示された。本研究の成果は、大学における低年次キャリア教育の必要性がいわれている中、大学生の学業に対するリアリティショックによる意欲低下状態と職業意識、学ぶ意欲を明らかにしたことは、効果的な低年次キャリア教育の在り方に示唆するものである。

キーワード：学業に対するリアリティショック、大学1年生、職業意識、自ら学ぶ意欲

Abstract

The purpose of this study is to examine the relationship with career consciousness and motivation to learn independently among university freshman. The questionnaire survey data are collected from university freshman. The analysis results clarified the following two points. Firstly, we clarify the relationship between reality shock for study and career consciousness. Secondly, we clarify the relationship between career consciousness and motivation to learn independently. Finally, we analyzed relevance between reality shock for study and career consciousness and motivation to learn independently of university freshman. In condition, reality shock for study among university freshman influenced on their depressed consciousness of study and career consciousness. In addition, we cleared that motivation to learn independently was depressed more thinking easily about career choice. From these results, we suggest need for career education and adaptation of university.

Key words : Reality shock for study, University freshman, Career consciousness, Motivation to learn independently

1 はじめに

近年、若者の就業における問題として、職業のミスマッチ、学校から社会への移行が円滑に行われない状態などが挙げられる。特に早期離職に関して厚生労働省（平成27年）によると、平成24年3月卒業生の新規学卒者の卒業3年後の離職率は、大学卒32.3%（前年比-0.1ポイント）と2000年以降ほぼ横ばいの傾向にある。また、早期離職の要因の一つに、学生の職業選択の問題があげられる。若松（2012）は、大学生の進路探索行動が十分になされていない事を指摘している。意思決定が遅れる学生は、受け身状態で情報収集や外的活動をほとんど行っていないのである。また、安達（2004）は、職業選択を主体的に行わない受け身な姿勢は、職業未決定の問題へつながる可能性が大きいと述べている。この様に、多くの若者は、将来の職業選択を主体的に行っていないことがうかがえる。

しかしながら、大学生にとって大学4年間はキャリア発達の視点から見ると、社会という次の段階へ移行するための重要な期間である。スーパーは、個人のキャリア上に「ライフスパン」という発達的な視点を盛り込んだ。生涯を通じた一連のライフ・ステージをマキシ・サイクルと呼び、成長段階（0～14歳）、探索段階（15～24歳）、確立段階（25～44歳）、維持段階（45～64歳）、解放段階（65歳以上）という5つの段階で構成されているという。探索段階（15～24歳）の特徴として、学校・余暇活動・パートタイム労働において、自己吟味・役割試行・職務上の探索が行われる（渡辺2007）。探索段階は、自分のパーソナリティ、興味、適性に適した役割を演ずる機会を探索する。すなわち自我と職業を探索する時期にあたる（Super, 1957 日本職業指導学会誌1960）。探索段階の間に個人には、将来の職業選択を導く思考や行動が始まる。個人がやるべきことを完了しなければ、組織への参入時や職務適応時にもがき苦しむと指摘している（Bartley & Robitschek, 2000）。つまり、探索段階の大学生が高い職業意識を持ち、将来に向けて自律的に納得のいく職業選択を行うためには、早い段階から職務探索を十分に行う必要がある。

2 問題意識

2.1 学業に対するリアリティショック

近年、大学生の問題として休学や留年を引き起こす、大学生の学業離れ、大学不適應などの問題が起こっている。その一つに、学業に対するリアリティショックがあげられる。リアリティショックとは、自分の期待や夢と、組織での実際の仕事や組織に所属することの現実とのギャップに初めて出会うことから生じるショックであるとされる（Schein, 1978）。半澤（2009）は、入学前に抱いていた大学での学業イメージと、入学後に実際に経験した学業の間にはズレがあり、そのズレを学業に対するリアリティショックとした。リアリティショックを受けた学生は、一時的に学業を回避する傾向があることを示唆している。さらに、山口（2002, 2003）は、大学生が

学業活動に自分なりの意味づけをして、コミットしていくことが必要であり、そのように仕向ける大学側の支援も不可欠であると述べている。このように、大学生が入学してから、学業を行う意味や目的が見出されないといった、大学生の学業離れの問題があげられる。

2.2 大学生低学年からの職務探索の必要性

ここからは、低学年からの職務探索の必要性をみていく。竹内・竹内（2010）は、職務探索には、キャリア探索行動と集中的職務探索行動の2つの概念があり、入社前のキャリア選択上の問題にとどまらず、入社後の組織適応をも規定する重要な個人活動であると述べている。キャリア探索とは、仕事、職業、組織について情報を収集する方法を与える意図的行動や認知とされている。また、理解を深めることで、仕事世界への移行やその後の適応プロセスに関わりをもつ意図的行動とされている（Stumph, Colarelli, & Hartman 1983, 安達2010）。安達（2010）は、就職先の内定を得るという短期的で形式的な決定ではなく、自分の力でキャリア探索に取り組み決定へ至ったという経験が、重要な意味を持つと指摘している。このように、高学年から本格的に職務探索を行うことは遅いとされ、学校から社会への移行、組織への社会化に影響を及ぼすとされている。つまり、大学生の早い段階に職務探索行動を促し、意識させることが望ましいとされる。

さらに、若松（2012）は、進路の意思決定は容易に決められないし、十分に考える必要があるため、入学の時期から進路に向けて啓蒙、情報収集・吟味が必要であると述べている。また、上西（2007）は、大学におけるキャリア教育は、入学時からの動機づけが重要であり、自ら学ぼうという動機づけ、人と積極的に関わっていこうという動機づけ、積極的に行動しようという動機づけが重要であると述べている。このように、ますます大学における低学年からのキャリア教育の推進や職務探索を促すことが求められている。一方で、大学生の問題として、学業に対するリアリティショックなど、大学生の学業離れや大学適応問題が起こりうる。つまり、大学1年生からキャリア教育に取り組んでも、大学1年生自身の学ぶ意欲や職業意識が低い状態では、自主的な職務探索を促すのは難しい。よって、大学1年生の学業に対する意欲や職業意識、職務探索行動を把握する必要がある。

そこで本研究は、入学して間もない大学1年生に着目する。入学して間もない大学1年生の大学不適応問題として、学業に対するリアリティショック状態が、職業意識や学ぶ意欲とどのような関連性があるのか検討する。このことは、主体性を持って自我と職業を探索できる人材を育てるキャリア教育の視点からも大いに役立つと考えられ、研究意義が大きいと思われる。大学1年生の学業に対する意識や職業に関する意識を明らかにすることで、初年次のキャリア教育の有効性や、職業選択を主体的に行う人材の育成に対する効果的な取り組みを導き出すことができよう。よって、本研究は以下の課題を検討していく。第1の課題は、大学1年生の学業に対するリアリティショックと職業意識の関連性を明らかにすることである。第2の課題は、大学1年生の職業意識と学ぶ意欲の関連性を明らかにしていくことである。

3 調査概要

3.1 調査対象

本研究では、近畿大学経営学部経営学科1年生を対象にアンケート調査を実施した。調査期間は、2016年11月下旬ごろ、科目担当教員の協力を得てアンケートを授業中に配布した。対象者は184名、有効回答数は177、有効回答率は96.2%であった。有効回答のうち、性別については、男性が141名（80%）、女性が36名（20%）であった。

3.2 分析指標

学業に対するリアリティショック

本研究では、大学1年生の学業に対するリアリティショックの現状をみるために、「大学生活に対する期待度」を点数で表してもらった。入学する前（100点）、入学直後、現在（後期授業）の点数をグラフで表した（図1）。

学業に対する意欲の低い状態

学業に対するリアリティショックとの結びつきから、大学生の学業に対する意欲の低い状態を測定するため、下山（1995）が作成した意欲低下領域尺度の15項目を使用した（表1）。「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」まで5点尺度で回答してもらった。

大学生の職業意識

大学生の職業意識を測定するため、下山（1986）が作成した職業未決定尺度から、一部修正し、16項目を使用した（表2）。「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」まで5点尺度で回答してもらった。

大学生の学ぶ意欲の自主性

大学生の学ぶ意欲の自主性を測定するため、櫻井ら（2009）が作成した大学生の自ら学ぶ意欲を測定する学習行動レベル尺度の16項目を使用した（表3）。「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」まで5点尺度で回答してもらった。

4 分析結果

まず、大学1年生の学業に対するリアリティショック（点数）をみってみる。入学直後の点数平均は70.5点であり、t検定の結果、入学前と入学直後の点数との間に有意差が有り、学業に対するリアリティショックが認められた（ $t(175) = 15.2, p < 0.05$ ）。一方、現在（後期授業）の点数平均は70.1点と入学直後との間には、有意差はみられず（ $t(175), p = 0.82$ ）学業に対するリアリティショック状態は、入学直後より現在（後期授業）まで継続している。つぎに、大学生の学業に対する意欲の低い状態を測定する項目の因子分析を行った。まず、各項目の平均値と標準偏差を算出したところ、2項目にフロアー効果が認められたので除外し、その後因子分析を

行った。因子の抽出には最尤法を用い、固有値1.0で因子の抽出を打ち切ったところ3因子を得た。さらにプロマックス回転を施した後、他の因子との整合性を勘案し、因子負荷量が.40以上の項目を取り上げたところ、第1因子は3項目、第2因子は4項目、第3因子は4項目となった(表1)。なお、因子負荷量が負であった項目については、これを逆転項目とした。第1因子を「授業出席の意欲が低い」、第2因子を「授業の学び意欲が低い」、第3因子を「大学生活の意欲が低い」と命名した。つぎに、 α 係数を用いて各下位尺度の内部一貫性を検討したところ、「授業出席の意欲が低い」は.61、「授業の学び意欲が低い」は.72、「大学生活の意欲が低い」は.92であった。同じく、大学生の職業意識を測定する項目について因子分析を行った。因子の抽出には最尤法を用いた。固有値1.0で因子の抽出を打ち切ったところ4因子を得た。さらにプロマックス回転を施した後、他の因子との整合性を勘案し、因子負荷量が.40以上の項目を取り上げたところ、第1因子は4項目、第2因子は3項目、第3因子は3項目、第4因子は3項目となった(表2)。第1因子を「職業選択安易」、第2因子を「職業選択迷走」、第3因子を「職業選択先送り」、第4因子を「職業選択自主性」と命名した。つぎに、 α 係数を用いて各下位尺度の内部一貫性を検討したところ、「職業選択安易」は.74、「職業選択迷走」は.40、「職業選択先送り」は.74、「職業選択自主性」は.60であった。最後に、大学生の学ぶ意欲を測定する項目について因子分析を行った。因子の抽出には最尤法を用いた。固有値1.0で因子の抽出を打ち切ったところ3因子を得た。さらにプロマックス回転を施した後、他の因子との整合性を勘案し、因子負荷量が.40以上の項目を取り上げたところ、第1因子は5項目、第2因子は6項目、第3因子は4項目となった(表3)。第1因子を「学び発展型」、第2因子を「学び挑戦型」、第3因子を「学び自律型」と命名した。 α 係数を用いて各下位尺度の内部一貫性を検討したところ、「学び発展型」は.90、「学び挑戦型」は.83、「学び自律型」は.71であった。

最後に表4は、今回の調査で用いた変数間の相関係数を示している。まず、学業に対するリアリティショックに関しては、大学生活に対する期待度(点数)を入学前(100点)と入学直後の点数差、入学前(100点)と現在(後期授業)の点数差を用いた。「入学前と入学直後の点数差」と「大学生活の意欲が低い」と正の相関がみられ、「入学前と現在の点数差」と「授業出席の意欲が低い」、「授業の学びの意欲が低い」、「大学生活の意欲が低い」すべてと正の相関がみられた。「授業の出席意欲が低い」を中心にみると、「職業選択安易」と「職業選択先送り」の間に正の相関がみられる。一方、「学び発展型」、「学び挑戦型」、「学び自律型」それぞれとの間には、負の相関がみられた。つぎに、「授業学びの意欲が低い」を中心にみると、「職業選択安易」と「職業選択先送り」の間には、正の相関がみられ、「職業選択自主性」との間には、負の相関がみられた。さらに、「学び発展型」、「学び挑戦型」、「学び自律型」それぞれとの間には、負の相関がみられた。最後に、「大学生活の意欲が低い」を中心にみてみると、「職業選択安易」と正の相関がみられ、「職業選択自主性」とは負の相関がみられた。さらに、「学び発展型」、「学び挑戦型」、「学び自律型」それぞれとの間には、負の相関がみられた。

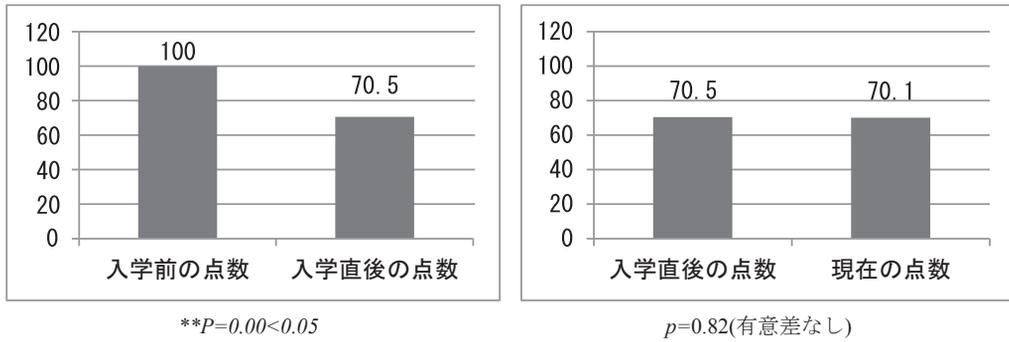


図 1 大学生活に対する期待度 (点数)

表 1 意欲低下尺度の因子分析結果

項 目	平均	SD	F1	F2	F3
F1：授業出席の意欲が低い					
何となく授業をさぼることがある	2.51	1.25	.732	.037	-.079
大学からの連絡事項を見落としてしまう事が多い	2.83	1.22	.446	.135	-.035
授業に出る気がしない	2.73	1.21	.437	.394	.005
F2：授業の学び意欲が低い					
大学で勉強することで自分の関心を深めている (R)	3.23	1.08	.045	-.820	.012
教師に言われなくても自分から進んで勉強する (R)	2.75	1.07	-.090	-.620	-.010
必要な単位以外でも関心のある授業はとるようにしている (R)	2.83	1.32	.054	-.605	-.006
勉強で疑問に思ったことはすぐに調べる (R)	3.30	1.09	-.043	-.445	-.024
F3：大学生活の意欲が低い					
大学ではいろいろな人と交流がある (R)	3.31	1.11	.165	-.056	-.710
大学にいるより、自分一人の方がいい	2.74	1.14	.029	-.089	.691
大学のなかで自分の居場所がないと感じる	2.27	1.04	.132	-.032	.659
大学での時間は、自分の生活の中で有意義な時間である (R)	3.27	1.06	-.053	-.189	-.519
因子間相関			F2	.314	
			F3	.288	.338

因子抽出法：最尤法，プロマックス回転

表2 大学生の職業意識の因子分析結果

項 目	平均	SD	F1	F2	F3	F4
F1：職業選択安易						
自分を採用してくれる所なら、どのような職業でもよいと思っている	2.20	1.06	.727	.071	-.150	.016
生活が安定するなら、職業の種類はどのようなものでもよい	2.61	1.17	.648	.016	-.105	.230
せっかく大学に入ったのだから、今は職業の事は考えたくない	2.40	1.09	.516	-.109	.404	-.093
将来の職業については、考える意欲が全くわかない	2.33	1.14	.383	.264	.333	-.193
F2：職業選択迷走						
自分が職業としてどのようなことをやりたいのかわからない	3.17	1.26	-.012	.797	.085	.157
将来やってみたい職業がいくつかあり、それらについて色々考えている	3.31	1.15	-.069	-.700	.015	.196
自分の将来の職業について何を基準にして考えたらよいか分からない	3.27	1.24	.039	.638	.132	.088
F3：職業選択先送り						
将来自分が働いている姿が全く思い浮かばない	3.15	1.31	-.163	.064	.772	-.001
職業決定といわれてもまだ先の事のようにピンとこない	3.40	1.26	.021	.051	.703	.089
職業のことは大学3,4年生になってから考えるつもりだ	2.68	1.21	.360	.086	.385	.047
F4：職業選択自主性						
職業に関する情報がまだ充分にないので、情報を集めてから決定したい	3.80	1.01	-.033	.068	.058	.722
職業は決まっていなくて今の関心を深めていけば職業に繋がると思う	3.51	1.09	.030	-.307	.096	.574
これだと思える職業が見つかるまでじっくり探して行くつもりだ	3.53	1.03	-.073	.205	-.011	.451
因子間相関			F2	.488		
			F3	.443	.597	
			F4	.032	.237	.307

因子抽出法：最尤法、プロマックス回転

表3 大学生の学ぶ意欲行動レベルの因子分析結果

項 目	平均	SD	F1	F2	F3
F1：学び発展型					
学んだことを自分や周囲の人に当てはめて考える	3.23	1.08	.880	-.162	.086
学んだことを身の回りの出来事と関連づけて考える	3.27	1.05	.858	-.021	.054
学んだことを生活の中で繰り返し思い出して考える	3.13	1.11	.791	.093	-.050
得られた知識が正しいかどうか、色々なケースに当てはめる	3.13	1.03	.726	.103	-.024
学んだことを実生活の中で試してみる	3.14	1.07	.702	.120	-.037
F2：学び挑戦型					
自分で目標を決め、その達成のために頑張っている	3.09	1.08	-.101	.836	.046
いつも自分の力の限界に挑んでいる	2.87	1.08	-.009	.731	.070
自分の知識やスキルを向上させてくれるものに挑戦している	3.28	1.04	.137	.625	.174
自分の力を試せるような問題に挑戦している	2.68	1.15	.299	.597	-.067
就職や進学に向けて、自ら計画を立て勉強に励んでいる	2.80	1.03	-.031	.579	-.068
専門の雑誌や書物はよく読んでいます	2.68	1.27	.178	.460	-.167
F3：学び自律型					
一人で解決できることは、できるだけ一人でしている	3.81	0.94	-.102	.100	.759
自分の力で課題を成し遂げたいので、多少時間がかかっても気にしない	3.46	1.00	.139	-.069	.687
むずかしい問題でも自分の力で解こうと努力している	3.33	0.97	.130	.003	.602
授業中わからない事があっても自分でじっくり考えてからでないと質問しない	3.32	1.12	-.143	-.077	.477
因子間相関			F2	.485	
			F3	.224	.215

因子抽出法：最尤法、プロマックス回転

表4 主要変数間の相関係数

変数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 入学前と入学直後の差											
2 入学前と現在の差	.64**										
3 授業の出席意欲が低い	-.08	.17*									
4 授業学びの意欲が低い	-.03	.21**	.37**								
5 大学生活の意欲が低い	.24**	.48**	.23**	.27**							
6 職業選択安易	.01	.12	.40**	.24**	.28**						
7 職業選択迷走	.08	.11	.12	.12	.08	.38**					
8 職業選択先送り	.05	.06	.29**	.26**	.14	.53**	.52**				
9 職業選択自主性	.05	.05	-.07	-.22**	-.20**	.06	.36**	.27**			
10 学び発展型	.05	-.02	-.17*	-.30**	-.26**	-.28**	-.14	-.13	.14		
11 学び挑戦型	-.12	-.20**	-.26**	-.25**	-.41**	-.31**	-.24**	-.30**	-.01	.52**	
12 学び自律型	.01	-.13	-.24**	-.28**	-.17*	-.18*	.00	-.11	.24**	.18*	.15*

N=177 ** : $p < .01$ * $p < .05$

5 考 察

5.1 学業に対するリアリティショック

本研究は、大学1年生の学業に対するリアリティショック状態における職業意識や学ぶ意欲の関連性に着目した。まず、大学生の学業に対するリアリティショックがどのような状態なのか、職業意識にどのような関連性があるのか、また、大学生の自ら学ぶ意欲にどのような影響を及ぼすのか検討した。大学1年生において、学業に対するリアリティショック状態については、図1に示されたように入学前よりも入学直後の方が低下しており、さらに、後期授業の時期も変わらず低下状態が継続している。よって、大学1年生の多くは、大学生活になじめず、学業に対して意欲が低下している状態であるといえる。さらに、入学前と入学直後の点数差が大きいほど大学生活の意欲が低くなり、入学前と現在（後期授業）の点数差が大きいほど授業の出席意欲、授業学びの意欲、大学生活の意欲すべてにおいて意欲の低い状態がみられた。このように学業に対するリアリティショックは、学業全般の意欲に影響を与えることが明らかになった。

5.2 学業に対するリアリティショックと職業意識の関連性

つぎに、学業に対するリアリティショックと職業意識の関連性についてみていく。「授業の出席意欲が低い」と「職業選択安易」、「職業選択先送り」が有意な正の相関を示している。このことから、学業に対するリアリティショック状態では、学業に対する意欲の低下と同じく、将来の職業について考える意欲も低くなる。さらに、職務探索行動を始動しなければいけない時期だが、職業について考えることを先送りにする傾向がある。つぎに、「授業学びの意欲が低い」と

「職業選択安易」、「職業選択先送り」が正の相関を示し、「職業選択自主性」と負の相関を示していることは、興味深い。つまり、授業学びの意欲が低下状態であると、さらに、職務探索を先送りにし、自ら情報収集などを開始する行動が低くなる。このように、低学年の間に十分な探索行動を行えていない原因の一つに、学業に対する意欲の低い状態が考えられる。特に、授業学びの意欲が低い状態だと職業意識に強い影響を及ぼす傾向にある。

5.3 職業意識と自ら学ぶ意欲の関連性

さらに、職業意識と自ら学ぶ意欲の関連性をみていく。「職業選択安易」と「学び発展型」、「学び挑戦型」、「学び自律型」の3つ全てが負の相関を示している。また、「職業選択迷走」、「職業選択先送り」と「学び挑戦型」がそれぞれ負の相関を示している。これらのことから、職業選択を安易に考え、先送りにしている状態や迷っている状態の場合、自ら学ぶ意欲がすべて低下状態となる。つまり、職業意識と学業に対する自ら学ぼうとする意欲は関連性があり、職務探索行動を促すためには、大学生の自ら学ぶ意欲を高める必要があると思われる。半澤・坂井（2005）は、大学生の学業と職業の接続に対する意識の研究は、従来検討されることは少なかったとされるが、現代の大学教育やキャリア教育、大学生の大学適応を論じる上でも大きな示唆を持つと指摘している。

6 まとめと今後の課題

これまで本研究は、大学1年生の学業に対するリアリティショックの視点から、職業意識と学ぶ意欲について明らかにしてきた。ここでは、総合的な考察と今後の課題について述べる。

まず第1に、多くの学生が、入学前に抱いていた期待が入学後に裏切られ、学業に対するリアリティショック状態にあり、後期以降（11月頃）も続いている状態である。つまり学業、授業、大学生活において、意欲が低下している状態である。このような状態の中、学生にキャリア教育について学ぶ環境を整えても、学生自体の学びに期待することは出来ないであろう。低年次からのキャリア教育が重要視されているが、同時に学生の視点に立ち、現状を把握することも重要であり、自ら学ぶ意欲を促進させる機会も必要である。

第2に、学業に対するリアリティショックと職業意識の関連性を明らかにしたことである。自我と職業を探索する重要な時期に、学業に対する意識が低下し、職業選択が行われていない状態である。このことは、低学年から職業選択を充分に行わない原因の一つと考えられる。よって、学生に職業選択を開始させるためには、学業に対するリアリティショック状態を緩和する環境を整える必要がある。例えば、インターンシップやボランティア活動など、大学生活から離れ自分自身を客観視できる振り返りの場を与えることも考えられる。

第3に、職業意識と自ら学ぶ意欲の関連性を明らかにしたことである。職業選択について安易

に考えるほど、自ら学ぶ意欲が低下していく状態が示された。これまで、職業意識と学業、授業、大学生生活の意欲との関連性は、あまり検討されてこなかった。しかし、大学1年生から職業選択を安易に考え、職業選択行動を行わないのと同時に、大学の学びに対しても積極的に行なわれていないことが明らかになった。このように、大学1年生の時期は、職業に興味を持ち、職務探索行動を同時に開始することで、自ら動き出す、自ら学ぶなどの自律性を促す動機づけの環境が必要である。すなわち、自ら学ぶ意欲と職業意識は非常に強い関連性を持っていることが言える。ただ単に、学生にキャリアについて学ぶ環境を整えるのではなく、大学1年生の時期に自律性を促す動機づけを与える必要がある。

近年、早期離職等の問題から、大学において低年次からのキャリア教育の強化が求められている。しかしながら、学業に対するリアリティショック状態で、学ぶ環境を整えただけでは、キャリアに関して学生の学びは十分ではない。学生が、職業意識を高め、職務探索を開始しようとする、自律性を高められる動機づけが必要となる。学ぶ環境、始動する動機づけが整ってこそ、低年次キャリア教育の効果が見えてくるのではないだろうか。これこそが、まさに大学にとっての人材育成の始まりであり、学生にとっての職務探索の始まりである。学業に対するリアリティショックと職業意識、学ぶ意欲を明らかにしたことは、効果的な低年次キャリア教育の在り方に示唆するものである。

最後に、今後の課題について述べておきたい。本研究の調査は、学業に対するリアリティショックと職業意識の関連性、職業意識と学ぶ意欲の関連性を検証したものである。しかし、学業に対するリアリティショックにどのように対処していくのか、学生に対する支援など、詳細に検討していくことが求められる。また、学業に対するリアリティショック状態が緩和した際には、職務探索行動はどのように変化するかなど調査を行う必要があるだろう。

参 考 文 献

- 安達智子 [2004] 「大学生のキャリア選択—その心理的背景と支援」『日本労働研究雑誌』No. 533。
 安達智子 [2010] 「キャリア探索尺度の再検討」『心理学研究2010年』第81巻第2号, 132-139頁。
 Bartley, D.F., & Robitschek, C. [2000] "Career exploration: A multivariate analysis of predictors," *Journal of Vocational Behavior*, Vol. 32, pp. 63-81.
 半澤礼之 [2009] 「大学1年生における学業に対するリアリティショックとその対処—学業を重視して大学に入学した心理学専攻の学生を対象とした面接調査から—」『青年心理学研究』21号, 31-51頁。
 半澤礼之・坂井敬子 [2005] 「大学生における学業と職業の接続に対する意識と大学適応—自己不一致理論の観点から—」進路指導研究『日本進路指導学会研究紀要』第23巻, 第2号, 1-9頁。
 厚生労働省 [平成27年] 「新規学卒者の離職状況 (平成24年3月卒業者の状況)」。
 櫻井茂男・大内晶子・及川千都子 [2009] 「自ら学ぶ意欲の測定とプロセスモデルの検討」『筑波大学心理学研究』38号, 61-71頁。
 下山晴彦 [1986] 「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』34号, 20-30頁。
 下山晴彦 [1995] 「男子大学生の無気力の研究」『教育心理学研究』43巻, 第2号, 145-155頁。
 Schein, E. H. [1978] "Career Dynamics: Matching Individual and Organizational Needs." (二村敏子・三善勝代 (訳) (1991) 『キャリア・ダイナミクス』白桃書房)。

大学1年生の学業に対するリアリティショック状態における職業意識と学ぶ意欲の関連性 (岩井)

- Stumpf, S.A., Colarelli, S.M., & Hartman, K. [1983] "Development of the Career Exploration Survey (CES)" *Journal of Vocational Behavior*, Vol 22, pp. 191-226.
- Super, D.E. [1957] "Psychology of careers: An Introduction to vocational development", New York: Harper & Brothers. (スーパー, D.E. 日本職業指導学会 (訳) (1960) 『職業生活の心理学—職業経歴と職業的発達—』誠信書房)。
- 竹内倫和・竹内規彦 [2010] 「新規参入者の就職活動プロセスに関する実証研究」『日本労働研究雑誌』 No. 596 2.3月号。
- 上西充子 [2007] 「大学におけるキャリア支援：その動向」上西充子 (編) 『大学のキャリア支援—実践事例と省察—』経営書院, 第1章, 24-76頁。
- 若松養亮 [2012] 「決められないのはなぜか」若松養亮・下村英雄 (編) 『詳解 大学生のキャリアガイダンス論』金子書房, 第3章, 27-42頁。
- 渡辺三枝子 [2007] 『キャリアの心理学』ナカニシヤ出版。
- 山口昌澄 [2002] 「大学生の「学業的自己疎外感」に関する研究—「学業的自己疎外感」尺度の作成および信頼性・妥当性の検討—」『神戸大学発達・臨床心理学研究』2号, 11-22頁。
- 山口昌澄 [2003] 「大学生の学業的自己疎外感に関する研究—外的統制・非社会的志向性・学業態度・大学生活への満足度との関連から—」『人間科学研究』10巻, 2号, 63-74頁。